

戯曲

デイオニユソス

—世界の墓—

I

正道

SEIDOU

目次

ディオニュソス 世界の墓 I	
前巻までのあらすじ	3
全体の目次	4
第1章 トラキアのオルフェウス	
登場人物	7
説法の待ち時間	7
オルフェウスの説法	9
第2章 太陽と月の詩	
登場人物	17
アポロン神殿にて	17
出家の教義	19
双子の神	21
アントロポスの神性	24
エウリュディケと一つになる	26
アニマとの関り	27
第3章 見捨てられた女たち	
登場人物	31
女たちの合議	31
ディオニュソス教徒の集まり	33

連れてこられた二人・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ディオニュソス 世界の墓 I

前巻までのあらすじ

ゼウスに襲われ、不本意な子供を産んだペルセフォネー。混乱した彼女は、この子供についての記憶を、すべて捨て去ってしまった。

そのため捨て子同然となったザグレウスは、アテナによって、クレタ島へと運ばれることになる。クレタ島には、住处としての洞窟と、世話係としてのシレノスが用意されていた。

ところが、このザグレウスを、ティターン神族の神々が見つけてしまう。彼らは、ゼウスの息子であるザグレウスを、八つ裂きにして食べた。

洞窟に残されたのは、ザグレウスの心臓だけだった。ゼウスはこの心臓を呑み込む。そして、その言わば「孕んだ」状態でもって、テーバイの姫君であるセメレーと交わった。

やがてセメレーは妊娠することになる。この胎児こそは、ザグレウスの生まれ変わりであるディオニュソス（二度生まれたる者）だった。

こうして再生しつつあったディオニュソス（ザグレウス）だが、セメレーと夫の不倫に嫉妬したヘラによって、その再生の成就を阻まれてしまう。すなわちヘラは、巧妙な策謀によって、セメレーを焼死させてしまうのである。

セレメーの胎児であったディオニュソスもまた、当然そのときに焼死するはずだった。

しかしこれを、再びゼウスが救う。ゼウスは自分の太ももに穴を開け、そこに胎児ディオニュソスを埋め込んだのである。

その後、月満ちて、太ももから赤ん坊として生まれると、成長したディオニュソスは、自分の本質（闇の神性）と出会うための道程に入ることになった。これを受難に遭うことになった、と言い換えてもよい。

そして、その受難の過程で発狂したディオニュソスに、ゼウスは、ある導きを与える。お前を救えるのはフリギアのキュベレー女神だけである、と。

そこでディオニュソスは、船長アケテスが操る船に乗ってフリギアに渡り、キュベレー神殿において、地下の世界へと降っていった。

その地下世界でディオニュソスが出会ったもの。それは、ヘルメス・トリスメギストスという至高の神と、自分の神性の本質である「虚無」だった。

そして、この虚無に、創造神たるゼウスが合体することによって、そこに「無からの創造」という真理が現れた。この真理が放つ光芒によって、ディオニュソスの狂気は一気に吹き払われる。

と同時に彼は「虚無の神」として成立した。つまりディオニュソスは、そのとき神々の一柱として完成したのだった。

それから十年。遠くインドまで「ディオニュソスの祭」を布教しに行ったディオニュソスは、そこから踵を返して、故郷であるテーバイへと戻ってゆく。それは、かつて母セメレーを貶め、今なお「セメレーの犠牲」の上に胡坐をかいている、テーバイ王家に復讐を果たすためであった。

かくして、残酷この上ない復讐（テーバイ王家の滅亡）を完遂し終えたディオニュソス。するとこの神は、今さらながら、死んだ母セメレーとの再会を切望するようになった。

その望みを果たすべく、ディオニュソスは地下の冥府へと降っていく。そして、その冥府下りで道連れとなったのが、神的な音楽家のオルフェウスだった。

互いに協力しあうことによって、ディオニュソスとオルフェウスは、無事に、冥王ハデスの王宮まで到ることが出来た。

しかし、それと同時に、ここから二人の運命の明暗が、はっきりと分かれることになる。

まずディオニュソスは、生みの母であるペルセフォネーの執り成しによって、ハデスの許しを得、そのまま恙なく母セメレーとの再会を果たした。結果的にセメレーは「テュオーネー」という新しい名前を得て、女神の世界の住人となった。

これに反してオルフェウスは、死者となった妻と会うために、ハデスから一つの条件を課せられた。それは、地上までの帰途、自分の背後を付いてくるはずの妻を「決して振り返って見てはならない」というものだった。

まことに残念なことに、オルフェウスは、この課題をクリアすることが出来なかった。その結果、妻は冥府へと引き戻され、自分自身は落胆しながら、一人で地上へと戻るしかなかった。

第三巻「世界の墓」の物語は、それから一年と少しが過ぎた頃から始まる。

全体の目次

前巻までのあらすじ

第1章 トラキアのオルフェウス

第2章 太陽と月の詩

第3章 見捨てられた女たち

第4章 オルフェウスの死

第5章 首とディオニュソス

第6章 豎琴とアポロン

第7章 ピュトンとピュティア

第8章 存在と虚無

第9章 大神アテナ

第10章 暁の子

第11章 オンパロス

エピローグ

第1章

トラキアのオルフェウス

登場人物

ヘレノス トラキアにあるゲテ村の長老。オルフェウス教の信徒。

クロリス ヘレノスの孫娘。

トアース オルフェウス教の幹部信者で、ナンバーワンの地位にある。

ペリパース オルフェウス教の幹部信者で、ナンバーツウの地位にある。

オルフェウス オルフェウス教の教祖。豎琴をつま弾きながら歌を歌うが、その歌詞の内容が、彼の宗教的な教えとなっている。

説法の待ち時間

トラキア地方のゲテ村。オルフェウスの話を聞くために、大勢の村人が集まっている。オルフェウス自身は、舞台裏で、説法前の休息を取っているところ。

聴衆の最前列には、オルフェウス教の幹部二人と、ゲテ村の長老（ヘレノス）ならびに孫娘（クロリス）とが並びあって話している姿がある。

ヘレノス このゲテ村で、オルフェウスさまの説法を聴くのは、はや二年ぶりのことです。まことに慶賀至極。嬉しくてなりませんな。

クロリス（トアースに）二年前、悲しくもオルフェウスさまは、このゲテ村から去っていかれました。デルフィに戻られたと聞きましたが、この二年のあいだに、オルフェウスさまに、何か変化はありましたでしょうか。

トアース 一年前に奥様を亡くされました。

クロリス それについては、デルフィから遠いこのトラキアでも、かすかに伝え聞いております。あの美しいエウリュディケさまが亡くなったと。たしか森で毒蛇に咬まれたことが死因ということでしたが。

トアース 我々も本当のところは知らないのです。噂によると、誤って、毒蛇の頭を踏んでしまわれたらしい。

ペリパース いや、森で男に襲われそうになったので、近くにいた毒蛇に、わざわざ自身の首元を近づけたという話だったぞ。つまり覚悟の自殺ということだな。

クロリス ……同じ噂話であっても、私には、そちらのお話のほうが真実に聞こえます。オルフェウスさま以外の男に犯されるぐらいなら、エウリュディケさまは、間違いなく死を選ぶでしょう。真の愛で結ばれたご夫婦ですから、妻としての操の堅さも、並大抵のものではなかったはずです。

トアース いずれにしても、奥様を亡くされたオルフェウスさまの落胆ぶりと言ったら尋常ではなかった。

ヘレノス それはそうでありましょう。

ペリパース それで「冥界まで奥方様を迎えにいった」という噂まで出たのだ。それほどにもオルフェウスさまは「エウリュディケさまと二度と会えない」という現実が受け入れられなかったのだ、と。かなり荒唐無稽な噂話だな。

クロリス でもオルフェウスさまは、現状、やもめ暮らしをなされているのでしょう。

ペリパース だから噂話なのだ。現実にはエウリュディケさまが戻っていたなら、べつにそんな噂話をするまでもない。

ヘレノス それはそうですね。

トアース とはいえ、奥方様の死後しばらく、オルフェウスさまが、我らの前から姿を隠されていたのも事実。オルフェウスさまが冥府に下ったという話は、あの睦まじい夫婦仲からすれば、十分にあり得ることだと思いますね。

ペリパース そうだとしても、結局エウリュディケさまを取り戻すことは出来なかったのだ。きつとな。それを物語るように、十日ほどして現れたオルフェウスさまは、悲しみの淵に落ち込んだように憔悴されていた。

クロリス 今はお元気そうですが。

トアース それはきっとアポロン神に慰められ、励まされたのだ。

ヘレノス と言いますと？

トアース あのととき憔悴しきっていたオルフェウスさまは、アポロン神殿に一カ月ほど閉じこもられた。そして、そこで劇的に人格を変えられたのだ。

クロリス それはどのように？

トアース 以前よりも心が頑強になり、その口から語られる詩には、凄みすら感じられるようになった。そのように大きな変化は、神の力によるものとしか考えられない。

ヘレノス なるほど、そういうことですか。

ヘリパース おっと話はここまでだ。オルフェウスさまが壇上に上がろうとしている。まもなく説法が始まるのだ。

オルフェウスの説法

オルフェウスが壇上で村民たちを見渡し、豎琴をつま弾きながら歌を歌い始める。オルフェウスにあっては、話することと歌を歌うことは同一である。

オルフェウス

聞け、トラキアの信徒たちよ。

久方ぶりに会うお前たちに今日は、

少しばかり変わった話をしてあげよう。

かつての私は、お前たちに、

夫婦仲睦まじく、子を大切に、

親には孝を尽くして生活してゆけど、

そのように教えてきたものだった。

言うなればかつての私は、お前たちに、

「在家」の教義を示したのだった。

人が自分の家庭を円満にするために、

どうしても不可欠となるところの教義、

つまり「家に在るために必要な教え」を。

しかし今日来たりしオルフェウスは、

お前たちに「出家」の教えをこそ、

この壇上の場を借りて、

説き明かしてみたいと考えている。

私のこの気持ちがかかるだろうか。

要するに私は、

これまで以上に深遠な教えを、

お前たちの信仰心を見込んで、

今ここで説いてみようと思っているのだ。

お前たちが少しでも、かの神聖なる主、

太陽神アポロンさまへと、

近づいていけるように。

ヘレノス（幹部たちに）オルフェウスさまの様子がおかしいですぞ。あの方はいったい、何を我々に語ろうとしているのです？

クロリス 私も胸騒ぎがします。

トアース その胸騒ぎは本物かもしれないぬ。たしかにアポロン神殿に籠って以来、オルフェウスさまの教えは、明らかに、それ以前のものとは、全く別のものに変わっている。

クロリス 全く別ですって。

ペリパース そして正直言って我々も、オルフェウスさまの新しい教義に関しては、そこにどうしても「付いていけないもの」があるのを感じているのだ。

トアース うむ、今はとにかく、オルフェウスさまの話を聞いてみてくれ。

オルフェウス

まずはじめに女たちよ、

申し訳ないが私は、金輪際、

お前たち女に教えを説くことを、

止めてしまおうと思っている。

お前たち女には、当然のこととして、

家庭を守るという大切な役割があるが、

私の新しい教えはもはや、

その役割と両立できるような、

ある種の「軽さ」を、

完全に捨て去ってしまっているからだ。

私の新しい教えを信奉すること、

かつ、その教えを体得することは、

「それ以外の営み」を兼業することを、

不可避なまでに不可能とする。

それほどにも、私の新しい教えは、

厳しくて難しいものなのだ。

クロリス なんですって！ あのオルフェウスさまが、私の大好きなオルフェウスさまが、もう私たちに教えを説いてくださらないと言うの？ いえ、それどころか、私たち女を切り捨てると言うの？

ペリパス そうなのだ。我らがオルフェウスさまは、数多の女信徒を切り捨てても、かつそれをいかに非難されようとも、それでもなお、自分の新しい教義の布告を貫徹しようとされているのだ。

ヘレノス オルフェウス教の新教義というものは、そんなにも厳しいものなのか。

トアース そうだ。そして実に驚くべき内容だ。

クロリス ああ、私は聞くのが怖い。

オルフェウス

今後、私の教えを受けられるのは、

そのため未だ家庭をもたない、

若き独身の男たちであるか、

あるいは、

すでに家庭を持っていたとしても、

その家庭の今後を顧慮することなく、

粛々とこれを捨て去ることができる、
無慈悲な男たちだけであると、
お前たちは「今ここで」知るがいい。

クロリス 何という暴論でしょう。だとしたらオルフェウス教の信徒は、これからは、家庭を持たない、あるいは家庭を捨てた男性たちだけで、構成されることになるのですか？

トアース ああそうだ。全くそうなのだ。だから私も自分の家庭を捨てたのだ。その上で、こうしてオルフェウスさまへのご奉仕を続けている。

オルフェウス

ゲテ村の男たちよ聞くがいい。
とりわけ今後の修行の邪魔になるのは、
お前たちの妻であり、恋人であり、
お前たちが、心から愛している、
これまで最も身近にいた女性たちである。

クロリス（耳をふさいで）聞きたくない。オルフェウスさまは、なんと恐ろしい教えを説き始めたのでしよう。

オルフェウス

そうだ男たちよ、お前たちは、
主神アポロンさまに近づくために、
これまで心底から愛していた、
女たちの許から離れなければならない。
それはむろん楽しいことではない。
むしろお前たちは、涙と血がにじむような、
そんな寂しさを心に残したままで、
これから孤独な求道者となるしかないのだ。
それを知った上で聞くがいい。
ただ独りになって、己の心と対峙すること、
それこそが新しいオルフェウス教の、
その新しい教義の「第一条」となる。
そして、その寂しい修行を続けるうちに、
お前たちはきつと気づくであろう。
かつて自分の外側で別れた女と、

いまや、その心の内側で、
別の形で再会することになることを。

ヘレノス（オルフェウスに）「どういふことでしょうか。分かれた女と、今度は心のなかで出会うというのとは？」

オルフェウス

押しなべて男の心のなかには、
霊的な女が住んでいるということだ。

この女をして霊魂（アニマ）という。
男たちよ、お前たちはすべからく、
外面的な妻や恋人とは離れ去って、
それによって反対に、

このアニマと出会わなくてはならない。

外側の女とは肅然と別れて、逆に、

この内側の女と出会わなければならぬのだ。

クロリス　なぜそんな……

オルフェウス

なぜと問うなら教えよう。

他でもない。心の内側の女たるアニマは、
男の心をアポロンさまの境涯に近づける、
霊的な導き手であるからだ。

アニマは明確な言葉を話すわけではない。

その姿を露わにするわけでもない。

しかし、求道者が心静かに佇むとき、

彼に靈感を与えて、

その存在を明確に感得させてくれる。

男たちよ、お前たちは、

その靈感に従って生きてゆくがいい。

その導きの最果てにはアポロン神がいる。

この境涯にまで達したお前たちは、

いまや己の心の世界の中において、

かの神と対面できるようになるのだ。

これこそが、私自身が知らしめる、

オルフェウス教の新教義の枢要である。

ヘレノス 何という過酷な教えなのだ。もしこれが詩として語られていなかったなら、あるいは音楽として奏でられていなかったなら、私はすぐにも、逃げるようにして、この場から飛び出していただろう。ペリパース そうなのだ。私もこのような厳しい教えからは遁走してしまいたい。しかしオルフェウスさまの美声が、美しい豎琴の音色が、私たちの心を捉えて離さないのだ。

クロリス ですが、ここには現に、私たち女がいるのですよ。男性の皆さんは、私たちのことを、どうするつもりなのか。

ヘレノス（うなだれて）どうすることも出来ない。ただ諦めてくれ。我ら男のことを。我らとともに生きていく平穏なる日々を。

クロリス おじいさま、本気で仰っているのですか！

トアース（クロリスに）本気に違いない。クロリスよ、ヘレノス殿は本気で「自分はオルフェウスさまからだけは離れられない」と言っておるのだ。

ヘレノス もちろん断腸の思いではある。だが、それでもオルフェウスさまと縁を切ることとは出来ない。それが、あの音楽に魅せられた人間の宿命なのだ。おそらく、ここにいる男たちの多くが、そのように感じているだろう。

クロリス それでは……男たちは皆、本当に私たち女を捨てていくと。

トアース うむ。

クロリス うむって、そんな簡単な言葉で、私たちは捨てられてしまうの？

ヘレノス（クロリスの視線を振り切るように、トアースに）私たちは、これからどうすればいいのでしょうか。

トアース すぐさま引越すことになる。すでにこの地から少し離れた場所に、新出家者たちのための敷地を用意してあるのだ。

クロリス えっ？

ペリパース そこは我々デルフィからの出向組が造設した土地で、もうアポロン神を祀る祠も建っている。そこはいわば「出家者の村」なのだ。

クロリス そんなものを、いつの間に。

ペリパース もちろん急ごしらえの簡素なものだ。それでも即日そこに住み、今日から出家生活を送ることぐらいは充分に可能だ。

ヘレノス まず村の男たちの意志を確認してからですが、少なくとも私は、今からそこに住むことに致します。この村の男たちの総勢は五十人ほどですが、きっと、あらかた付いてくることでしょう。

クロリス ……教えてください高弟のお二人さま。では私たち女はどうすればいいのですか？

トアース 女たちは、村に戻って家を守ってくれ。それほかない。

クロリス 家を守れだなんて、たった今、私たちの家庭は壊れてしまったじゃありませんか。夫や父を失って、どうして家庭が成り立つのです。しかも家を壊したのは、他でもないオルフェウスさまです。オルフェウスさまの教えです。そして、それに盲従しようとしている、あなたたち男です。

トアース すまない……それしか言えない。

クロリス 謝って済まされるような事ではないわ！

ヘレノス クロリス、それでもわしは行く。それが信徒としての務めなのだ。

クロリス ああ、もう何を言っても無駄なのですか……

「ヘレノスと幹部たちがクロリスに背を向けて歩いていく。出家者の村へ入植する者たちの募集が始まるものらしい」

第2章

太陽と月の詩

登場人物

オルフェウス これは冥界に下り、エウリュディケを取り戻そうとして果たせなかった直後のオルフェウスである。

アポロン オリュンポス十二神の一柱。太陽を司る神であり、デルフィの神殿に住んでいる。オルフェウス教の主催神でもある。

アルテミス オリュンポス十二神の一柱。月を司る女神であり、アポロンの双子の妹でもある。

アポロン神殿にて

ここで時間をさかのぼる。

オルフェウスは、ディオニソスとともに冥界に下ったが、結果的に、妻エウリュディケを取り戻すことは出来なかった。その傷心を引きずったまま、オルフェウスは、自身の本拠地であるデルフィに戻る。そこに建つアポロン神殿のなかで、彼は自身の主神であるアポロンと対話することになる。

オルフェウス アポロンさまは私を笑うでしょうね。我々は死すべき人間。生まれて死ぬのは当然の摂理であるのに、その摂理を破ってまで、死者を、生の世界へと連れ戻そうとしたのですから。しかも、その試みに失敗した私は、こうしておめおめと、一人で地上に戻ってきたのです。

アポロン お前が他の人間であつたら笑っていたかもしれないぬ。だがお前はオルフェウスだ。私の大切な友オルフェウス。私にお前を笑うことなど出来ようか。

オルフェウス ありがとうございます……

アポロン そして、どんな夫婦よりも仲睦まじかった、オルフェウスとエウリュディケの夫婦。その夫婦の形が、死によって壊れてしまったのだ。それは恐ろしいほどの悲劇。とても笑ってなどいられぬ。た

ただ胸が痛むばかりだ。

オルフェウス そんなにも優しい言葉はかけないで下さいませ。抑えていた激情が溢れてしまいます。（嗚咽しながら）ああ、エウリュディケ、エウリュディケ、私はもう二度とお前に会えないのか。これからお前がいままの人生を送るしかないのか……苦しい、苦しい、アポロンさま苦しいです。

アポロン 見ているほうが辛くなってしまう。

オルフェウス いま私がこうして生きているのは、ただただ、自殺を禁じていらっしゃるアポロンさまの教義があるからです。もしそうでなかったら、私は早々と自殺して、妻と同じ「死後の霊魂」になっていたことでしょう。そうして今頃エウリュディケと相まみえていたはずです。

アポロン ならば、お前に感謝の言葉をかけなくてはなるまい。オルフェウス、帰ってきてくれてありがとう。私のもとに戻って来てくれてありがとう。

オルフェウス そんな勿体ない！

アポロン いや、お前は私にとって、本当に掛けがえのない存在なのだ。もし良き学び手がいなかったらば、どうして師は、よき教え手となることが出来るだろう。私の教えに価値があるとすれば、それは、その教えを即座に学びとることが出来る、お前という生徒がいるからなのだよ。

オルフェウス 私は、ただアポロンさまの光輝に憧れているだけの存在です。わが身の醜さを弁えもせず、炎に向かって飛んでいつては、その身を焼き尽くす蛾にも似た存在です。

アポロン そのように自分を貶めずともよい。お前が、私にとって大切な人間であることは間違いないのだからな。

オルフェウス 本当に勿体ない言葉です。

アポロン だから私は、心よりお前を助けてやりたいと思う。救ってやりたいと思う。そしてそのために、今こそお前に「新しい教義」を説いてやりたいと思う。

オルフェウス 新しい教義ですって？ その教義は、私をこの悲しみから救い上げて下さるのですか？ エウリュディケを失ったこの悲しみから。それともそれは、私が再び冥府に行くための指南となるものなのですか？

アポロン お前を二度もハデスに赴かせるつもりはない。お前は、私の新しい教えによって「生きながらにして、エウリュディケを感じられる」ようになるのだ。

オルフェウス 生きながらにして妻を！ それは一体どういう教えなのですか！

出家の教義

アポロンとオルフェウスの対話が続く。

アポロン 私は今まで、お前に在家の法——つまり「家に在る者のための教え」を説いてきた。家庭のなかに愛の光を灯し、夫婦の仲を円滑にし、子供たちを健やかに育てることを、その教義の柱として申し送ってきたのだ。

オルフェウス はい、そのとおりです。

アポロン しかし、私がこれからお前に与える教義は「在家の法」ではない。私がこれからお前に与えるのは「出家の法」なのだ。

オルフェウス 出家……出家とは何なのですか。

アポロン 出家とは、家庭を出奔してでも真理を求めること。あるいは、真理を求めるためには、家庭すら顧みない徹底性のことだ。エウリュディケという唯一の家族を失ったお前になら、このような教えを説いても構わないと思うのだ。

オルフェウス いや……今もエウリュディケは、私の心のなかでは大切な家族です。その家族を顧みないとしたら、私とエウリュディケとの距離は、ますます離れていってしまうのではありますまいか。

アポロン 確かに初めのうちはそうかもしれない。だがこの教えは、人が「外面の女」から離れて「内面の女」に出会うための教えなのだ。

オルフェウス 内面の女、ですか？

アポロン オルフェウス、お前の外側にあった女、つまり妻であるエウリュディケは、たしかに先般、この世からいなくなった。よって、もう以前のように会って話すことは出来ない。

オルフェウス ええ、そうです。

アポロン しかし私の新しい教義によって、お前は自分の心のなかでエウリュディケと会うことになる。そしてさらには、お前は、彼女と一つになることが出来るのだ。

オルフェウス エウリュディケと一つにですって！ 本当ですか。そうなるための教義とは、一体どのようなものなのでしょう。

アポロン その教えを説くまえに、お前にひとつ尋ねたい。オルフェウスよ、お前は男である以前に人間であるか？ それとも人間である以前に男であろうか？ またエウリュディケはどうだろう。彼女は女である以前に人間であるか？ それとも人間である前に女であろうか？

オルフェウス なんと奇異な質問でしょう。そんなことを考えたこともありません。

アポロン まあ、そうであろうな。

オルフェウス ですが、それは答えを出すのが、ごく簡単な質問でもあります。だって、人間を男と女に分けることは出来ませんが、男を人間に分けることも、女を人間に分けることも出来はしませんから。それは明らかに、私たちが、男や女である前に人間であることを示しています。

アポロン そう、それで正解だ。では、ここでは分かりやすいよう、お前のいう「男女に分けられる前の人間」を、ただ単に人間とは呼ばずに「アントロポス」と呼んでおこう。

オルフェウス ああ、なるほどアントロポスですか。ですがそれは、ちょっと多義的な名称ではありませんね。それを普通に使えば、単なる人間のことにのみなります。ですが、ここではアントロポスを、もっと深い「初原の人間」とか「原人間」といった語意で使おうとしているのですね。

アポロン ああ、そのとおりだ。してみると、人が本当の意味でアントロポスになるためには、人は「男でもあり、女でもある者」とならねばならない。そういうことにならないだろうか。

オルフェウス これまた、今まで考えたこともないことですが……ええ、確かにそういうことになるかと思います。

アポロン オルフェウスよ、実は人間は、その誰もがアントロポスになれる可能性をもった存在なのだ。じつに誰もが先天的に「男女を超越する心の機能」を持っている。私の新しい教義は、その機能を解放するための教えなのだ。

オルフェウス それは、まったく驚くべき言葉です。

双子の神

アポロンとオルフェウスの対話が続く。

アポロン そして、その機能が実際に起動し、かつ機能の目的を完遂させたものこそが、このアポロン神なのだ。私は男神であると同時に女神でもある。

オルフェウス どういうことでしょう。私にとってのアポロンさまは、純粋な男神に他ならないのですけれども。

アポロン それは、お前に初めて見せる「この姿」を見れば分かるはずだ。

「アポロンが、オルフェウスに対し背を向ける。すると、アポロンの背中側がアルテミス神になっている。その瞬間から背景が宇宙空間のようになり、オルフェウスも、その空間に漂うことになる。アルテミスのお腹は、妊婦のように膨らんでおり、頭には、月と星とで出来た王冠を被っている」

オルフェウス これは何としたことか！ 私は夜の中空に浮いているのか？

アルテミス そんなに怖がる必要はありません。あなたはちゃんと、星屑の上に立っておりますよ。

「オルフェウスが足元を確かめると、たしかに小さな隕石のような踏み石が、足下にある」

オルフェウス（少しグラつきながら）初めてお目にかかりますが、あなた様はもしかして、月の女神であらせられるアルテミスさまですか。

アルテミス　そうです。私はアポロンの双子の妹と言われますが、その実、太陽神アポロンと同体の女神であるのです。

オルフェウス　たしかに、アポロンさまが振り返っただけで、あなたが現れました。

アルテミス　神におけるディディモ（双子）とは、こういうことなのです。互いの意識を共通させれば、私たちは、いつでも一つの体になれるのです。

オルフェウス　けれどアルテミスさまの姿は、これまで私が考えていたものとは大いに違っています。たしかアルテミスさまは「永遠の処女」と呼ばれていたはずですが、そのお腹には、明らかに胎児がおりれる。ということは、あなた様が処女というのは誤りなのですね。

アルテミス　いいえ私は処女です。永遠に処女である女神です。

オルフェウス　そうですか、これは失礼いたしました。

アルテミス　いえ、あなたが勘違いするのも仕方ありません。というのも、私が表しているものが「処女の母性」だからです。これを言い換えて、精神的な母性、神的な母性と言ってもよいでしょう。そして、私の子宮に入っている胎児はアポロンに他なりません。

オルフェウス　あなたのお腹のなかにいるのがアポロンさまですって！

「アルテミスがくると背中を向ける。すると背景がアポロン神殿に戻り、アルテミスの姿もアポロンのそれに戻る」

オルフェウス　も、戻った……

アポロン　オルフェウスよ「上にあるものは、下にあるものの如し」と言う。つまり一般的な人間の妊婦もまた、その胎児が男の子なら、雌雄同体の一形態に数えられるのだ。

オルフェウス　と言いますと……

アポロン　妊婦は、その子供と自分とを数えて二人とも言えるし、子供を内臓として扱えば一人とも言える。いわば二即一。しかし私たちの境涯におけるそれは多即一、あるいは全即一となる。

オルフェウス　それは一体どういう……

「アポロン、また反転しているアルテミスとなる。背景は宇宙」

アルテミス 話を急ぎすぎだわアポロン。私が噛み砕いて話しますから、オルフェウスよくお聞きなさい。

オルフェウス は、はい。

アルテミス オルフェウス、人は男と女を超越してアントロポスとなるとき、必ず「女性原理に男性原理が包まれる」という形で雌雄同体になるの。それこそ、大いなる母の子宮のなかで、小さくうずくまりながら憩っている男の胎児のように。

オルフェウス 偉大なことこの上ないアポロンさまが、アルテミスさまの中では胎児に過ぎないということですか。

アポロン（反転して）私は太陽神としては偉大だが、太陽は一つの星でもある。そして夜空の星としては、私は月を取りまく小さな瞬きに過ぎない。それは母なる子宮に包摂された胎児のようにちっぽけなものだ。

アルテミス（反転して）けれど太陽に照らされなくては、私は微かに光ることもままならないのです。オルフェウスよ、それでも私は、アポロンよりも偉大ですか？

オルフェウス おお、私には、どちらが大いなるものか分からなくなりました。

アルテミス それでいいのです。それが本当のことです。かくしてアポロンとアルテミスは、完全に平等なるディディモ（双子）なのです。

アポロン（反転して）かくして我らは、ひとつに結合された男女の象徴となる。そしてそれは当然、男と女を超えたアントロポスの象徴でもある。

アルテミス（反転して）そればかりではありません。私たちは「アントロポスとなった人間は、すでに『神の似姿』としての神性を持ちえている」と教える神でもあるのです。

アントロポスの神性

アポロン、アルテミス、オルフェウスによる三つ巴の対話が続く。

オルフェウス　いまだ男でしかない私に教えてください。アントロポス（原人間）の神性とは何ですか。

アポロン（反転して）

アントロポスは無限を一望する。

無限を一つのものとして掌握する。

かつまた「無限」のうちに含まれぬ、

かような存在は決して無きゆえに、

アントロポスは「存在の原理」を、

ここに十全に知ることになる。かくして、

アントロポスは「存在の神」である。

アルテミス（反転して）

そして無限とは母なるものの表れ。

大きく手を広げた海原の如きもの。

男は、その母なるものに紛れた芥にすぎず、

アントロポスから男へと還ってゆく時には、

ほんの僅かな記憶しか持ち帰れない。

それは胎児の記憶のようにアヤフヤな記憶、

体系化することなど望むべくもない、

小さな泡沫のように儚い記憶。

オルフェウス　それは人間が「アントロポスの状態」には、恒常的には留まれないということを言っているのですか？

アルテミス

人間がアントロポスでいられる時間は、

ことのほか短く、そのように思うよりも、

さらに短いものなのです。人は、

「存在の神」に合一することは出来ませんが、

持続的にこれと同一化することは、
どれほど願っても決して出来ません。

アポロン（反転して）

しかし、それを虚しく思うなかれ。
なぜなら刹那の一瞬であることは、
「そこ」では、永遠であることと、
まったく矛盾することがないからだ。
そこには一瞬どころか、
時間的な虚無ですらある「現在」が、
過去と未来に向かって、
すべての時間を放射するさまがある。

アルテミス（反転して）

人は始まりの答えを探して、
その思いを過去に向けてゆきますが、
どれほど過去を遡ってみても、
その始原に辿り着くことは、
決して出来ません。そしてまた人は、
未来に思いを馳せずにはいられません、
どれほど先々のことを予想してみても、
未来の情景がその目に映ることは、
決してありません。

アポロン（反転して）

しかし、ここには全てがある。
つまり過去と未来の全てがあるのだ。
アントロポスの居場所には、
過去と未来が創始される場所がある。
かくして存在の神たるアントロポスは、
究極の歴史学者であり、
また究極の予言者でもある。
このアポロンが予言の神である所以は、
まさしくここにあると言ってよい。

オルフェウス ではアントロポスとしての人間は、
存在の神として無限を包摂し、さらには過去と未来

のすべてを見渡すというのですね。それが人間本来の神性なのですね。

アポロン おお、即座にそのように要約できるお前だからこそ、私はそなたを「良き生徒」と思わずに
いられないのだ。

アルテミス（反転して）存在するもの全てを自分と言い切れるなら、そこに孤独の不安は入り込めませ
ん。また、過去と未来の全てを見渡せるならば、そこに無知の不安は入り込めません。ゆえにこの境涯
には、究極の安らぎがあるのです。

アポロン（反転して）だから私はお前に言うのだ。オルフェウスよ、是が非でもここに来るがよい、と。

エウリュディケと一つになる

アポロン、アルテミス、オルフェウスによる三つ巴の対話が続く。

オルフェウス しかしながら、それが「私とエウリュディケが一つになること」と、どのように関わる
のでしょうか。

アルテミス（反転して）オホホ、やはりアントロポスではないあなたには、真理を裸にして晒しても、
肝心なところは、何も伝わらないのですね。

アポロン（反転して）オルフェウスよ、私が「無限の存在」と言うとき、そこには当然エウリュディケ
という存在も含まれているのだよ。

アルテミス（反転して）たとえばエウリュディケが「死んだ過去の人間」だったとしても、存在の神が放
つ「永遠」のうちには、その過去の全てさえ含まれているのです。

オルフェウス ということは、私がアントロポスになりさえすれば、私とエウリュディケは間違いなく
一つになれるのですね。そのとき、この孤独と虚しさのすべてが、完全に癒されるのですね。

アルテミス ええ、そうなると約束しましょう。

オルフェウス では私は、一体どのようにすれば、男女の性差を超越してアントロポスに、存在の神になれるのでしょうか。

アニマとの関り

アポロン、アルテミス、オルフェウスによる三つ巴の対話が続く。

アルテミス オルフェウス、あなたは自他ともに認める、生来の詩人ですね。

オルフェウス ……はい、そうです。

アルテミス では、その詩はどこから生まれてくるのでしょうか？ あなたの頭の中ですか？ それとも、あなたの目が見たもの、あなたの耳が聞いたもの、そうした感覚的なものの中から生まれてくるのですか？

オルフェウス どちらもイエスです。けれども、どちらも真実の意味ではノーです。

アルテミス と言いますと？

オルフェウス たしかに私の思索も、私の体験も、詩の材料にはなります。ですが、詩の命とも言えるべきインスピレーション（靈感）は、心の奥のほうの、私の意識が与り知らない世界からやってくるのです。

アルテミス そうであるなら、その、あなたの心の奥のほうにある世界にこそ、あなたと合一すべき女性がいるのです。あなたにインスピレーションを与えているのが、まさしく「彼女」なのです。

オルフェウス エウリュディケ？

アルテミス まだ、そのような「固有名詞」で彼女を呼ぶべきではありません。彼女の名前はアニマ（靈魂）です。男性の心には、あなたに限らず、必ずアニマがいるのです。そのアニマと関係を深めていくことこそが、男女合一の道程に他なりません。

オルフェウス それはどうやって？

アポロン（反転して）意識性という太陽を光らせることが出来た男は、今度は星としての受容性を学ばなければならぬ。その学びの過程で、月（アニマ）がその明るさを増してゆくだろう。そのときお前は、星が月に付き従うように、内面のアニマからの呼び声を、素直に受容しなければならない。

オルフェウス それは、詩のインスピレーションを貰い受けている、今の私のようなものでしょうか。たしかに私は、そのとき驚くほど敬虔な気持ちで充たされているのですが。

アルテミス（反転して）そうです。敬虔であるとは、自らを小さくして、大きな存在のまゑに帰順すること。ですからそれは、まさに「母に抱かれた幼子の安らぎ」のようなものです。その敬虔さを忘れず、自分を「いつでもアニマからの靈感を受けとれるような心境」に保つことこそ肝要です。

オルフェウス ああ、それならば私にもよく分かります。

アポロン（反転して）だがアニマからの呼び声は、外面にある女たちの声によって、容易に掻き消されてしまう。だから、この道を行くものは、どうしても出家して孤独のうちに生きなければならない。

オルフェウス ああ、それで「出家」という行為が重視されることになるのですね。

アポロン そうだ。そして、幼子のような心境でいることが、必然的に、より純粋な「母なるもの」を引き寄せることになる。そして「その時」がやってくるのだ。

オルフェウス その時とは？

アルテミス（反転して）妊婦的な恩寵が恵まれるときです。幼子はその時には胎児となり、アニマは妊婦となるのです。そこには「妊婦」という二者合一の姿が現れる。それこそ男女が一つとなったアントロポスの成就なのです。

オルフェウス では、もうすぐなのですね。私が詩のインスピレーションの前に敬虔であり続け、幼子のような受容性に磨きをかければ、もう、すぐにも私に恩寵が与えられるのですね。そのとき私はアントロポスとなって、エウリュディケと再会できるのですね。

アルテミス そうです。そういうことです。かの無限のうちには、たしかにエウリュディケの魂も含まれています。

オルフェウス ああ、私はその時が待ちきれない。早く、早くエウリュディケと会いたい。そして彼女と一つになりたい。

アポロン（反転して）ならばオルフェウスよ、そなたは、これと見込んだ聴衆に、この教義を伝え述べよ。すでにお前には、オルフェウス教の信徒がいるはず。その者たちに、この新しい教えを述べ伝えるのだ。

オルフェウス それはどうしてでしょうか？

アポロン 教えることこそが、もっとも効率のよい「学び」だからだ。学生の中には見えない「自己の至らざる点」が、教師になったときには丸裸になる。その欠点を一つずつ埋めていくことが、お前にとって最も効率的な学習となるだろう。その学習が、お前と「その時」の距離を急速に縮めてくれるはずだ。

オルフェウス 分かりました。ごもっともなお話です。ではまず、身近な信徒たちに教義を伝え、そのあと、拠点の一つであるトラキアで教えを宣べましよう。

第3章

見捨てられた女たち

登場人物

ラディオケー ゲテ村の主婦。元オルフェウス教徒。

ゼリア ゲテ村の主婦。元オルフェウス教徒であるが、ディオニュソス教の男性信者と浮気している。

ポリュメネー ゲテ村の主婦。元オルフェウス教徒。

クロリス ゲテ村の長老の孫。

タリア ディオニュソス教徒のリーダー。四〇歳ぐらいの女性。

ネアイラ ディオニュソス教徒。タリアの参謀のような存在で、若い女性。

女たちの合議

トラキアのゲテ村。ときは、男たちが「出家者の村」に入村していった日の夜である。昼間オルフェウスが遊説した広場に、いまは夫たちに見捨てられた妻たちが集まっている。老若さまざまな三十人ほどの女たちであるが、その中で最も勢いのある三人が話をしている。そこに長老の孫であるクロリスも加わる。

ラディオケー 私たちは、これから一体どうなるのでしょうか。夫たちをオルフェウスさまに奪われ、ただ家庭を守れただけ言いつけられて。

ゼリア 本当に……あんなに愛し合っていた夫が、一日の猶予も挟まず「出家者の村」に行ってしまったのです。私には、この現実が到底信じられません。

ポリュメネー あたしも同じ気持ちです。それに不思議に思いませんか。これまで、こと家庭を守ることに関しては、その堅実な教えによって、私たち主婦に、大きな恩恵を下さったオルフェウスさまなのに……

ゼリア（頷きながら）ねえ、どうして今になって、あんな爆発的に家庭を壊すようなことを言ったのかしらね。

クロリス あの、それに関しては私、オルフェウス教の幹部の方から、傍証となるようなお話を聞いてるんです。

ポリュメネー それはどのような内容ですか？

クロリス 実はオルフェウスさまは、一年前に奥様を亡くされているのです。そのため男やめになったのですが、時期的に、そのあたりから教えの内容が変わってきたということでした。

ラディオケー 待って、それってこういうこと？ 妻を失った教祖が、自分と同じ悲哀を信徒たちにも味わせてやろうとした。そうして「妻を置き去りにして、家庭から離脱せよ」という教えを説いたっていう。

ゼリア 何よそれ、まるで腹いせじゃない。

クロリス まさかオルフェウスさまが、そんな安直な考えをするとは思いませんけれども。

ラディオケー いえいえ、そういうことでしょう。その他にどんな解釈のしようがあるっていうのよ。だって、あまりにも変な教えじゃない？ 家庭を捨てて、男たちだけで生活しろだなんて。もちろん、それにヘーコラ従った夫たちも変だけど。

ポリュメネー いえ変じゃないわ。オルフェウスさまの歌と詩を耳にしたら、誰だってその音色の虜になっちゃうもの。どうしても、また聴きたいと思ってしまうもの。その機会を何度だって持ちたいと思ってしまうもの！ 男たちがそうだったろうし、一昨日までの私だってそうだった。

クロリス 私もそうでした。

ゼリア 私も……

ポリュメネー でも私は、今回のことで、その陶酔から醒めたわ。オルフェウスさまが「女である自分」を受け容れないと宣言した瞬間、私に対するオルフェウスさまの魔力は消えた。本当に、まるで冷水を浴びせられたような感じだった。

ゼリア それは私も分かる。酔ったときの火照り顔に、冷水をかけられたような。

ポリュメネー 酔ったときって……えっ、あなた、お酒を飲んだことがあるの？ あれはオルフェウス教団では、固く禁じられている飲み物よね。邪神ディオニュソスが世に広めてる飲み物だってことで。

ゼリア ごめんなさい、好奇心で飲んでしまったの。ほら、このあたりにもディオニュソス教の人たちが、ずいぶん増えてきたじゃない。彼らから分けてもらいう機会があったんで、つい少し飲んでしまったの。

ポリュメネー あきれた。

ゼリア でも、飲んだところで何も変わりはないわ。少しの間だけ気持ちよくなるだけよ。

ラディオケー 私は呆れないし、怒ったりもしない。だって私たちは、もうオルフェウス教徒じゃないんだもの。私たちはオルフェウスさまから見捨てられたの。踏みつけられたの。そうして、今こんなにも苦しんでいるの。

クロリス ええ、そうですね。

ラディオケー（ゼリアに）あなたが「お酒」というもので気分が良くなったというなら、私はむしろ、進んでそれを飲んでみたい気持ちだわ。

ゼリア それなら簡単よ。だってディオニュソス教の信徒は、こんな月夜には、必ずかがり火を焚いて踊ってるはずだもの。明かりと音楽を探せば、すぐに彼らと出会えると思う。

ラディオケー それなら探してみしようよ。お酒を飲ませてもらうために。

ゼリア そうよ、お酒でも口にしなければ、何も出来やしないわ。

ディオニュソス教徒の集まり

同じ夜、かがり火を焚いて騒いでいる集団があった。もちろんディオニュソス教徒の集まりである。ただし、そこにディオニュソスがいる訳ではない。これは飽くまでも、ディオニュソスの布教によって派生した、新しい小集団であった。

そのためやや教えが歪んでしまっており、より信徒たちの攻撃性が強まっているくらいがある。集団の

リーダーはタリアといい、かなり勝気な女性。現状、天幕のなかで酒を飲んでいる。そこに元オルフェウス教徒の女たちが合流しようとしている。

ネアイラ（駆けつけて）タリアさま、タリアさま、この目で確かめてまいりました。代表者から話も聞いてきましたよ。

タリア（座って酒を飲みながら）で、誰だったんだ？ どの誰が、私たちの祭場に近づいてきたんだ。

ネアイラ それが、あのオルフェウス教徒なんですよ。しかも三十人ぐらいいはいます。どうしますか、男たちをやって追ひ返しますか？

タリア オルフェウス教徒だと？ あのツンとお高くとまった奴らか。あいつらが私たちのところに来るなんて珍しい。いや本当に珍しい話じゃないか。せっかくだから、主だった奴らを二、三人連れてこい。酒を酌み交わしながら、向こうの話を聞いてやろうじゃないか。フフフ。

連れてこられた三人

タリアのもとに、ラディオケー、ゼリア、クロリスが連れてこられる。連行してきたのは、ディオニュソス教徒である二人の男だった。そして、そのうちの一人が、たいそう好色な眼差しをゼリアに向けている。タリアとネアイラが、その様子を興味ぶかそうに眺めている。

タリア（ゼリアに） その女、お前のことは見た覚えがあるな。

ゼリア はい。私は何度かディオニュソス教の祭に参加しております。タリアさまが私を見かけたのは、その折のことでしょう。

ラディオケー ええっ、あなたディオニュソス教の祭にまで参加していたの？ お酒を少し飲ませてもらっただけじゃなかったの？ 汚らわしい！ 夫がいる身なのに信じられないわ！

タリア オイオイ、我らが祭を「汚らわしい」とは、さすがに聞き捨てならんな。

ラディオケー す、すみません。あまりにも驚いてしまって。

ゼリア その、あの、関係した相手がディオニュソス教徒だったので、自然とそうなってしまった。

タリア さしずめ後ろの男が、その情を通じた相手なのだろうな。

ゼリア（背後の男を見てから）はい。

ラディオケー 呆れた。あなたが、そんなに身持ちの悪い女だとは思わなかったわ。じゃあ、ここまでの道のりも、きつと足しげく通ったルートなのね。そりゃ迷わずここに来られるはずだわ。

ゼリア（舌を出しながら）てへ。

タリア で、お前たちは、どういう訳があって私たちの許にやってきたんだ？

ゼリア あの……お酒を飲んでみたいという話になって。

タリア 酒をか？ ま、それはいくらでもあるから構わないが、さすがに、それだけではあるまい。なにせオルフェウス教徒が、仇敵ディオニュソス教徒の巣にやって来たんだ。その理由が「酒を飲んでみたかったから」では薄弱すぎる。

クロリス そもそも私たちは、もうオルフェウス教徒ではないのです。私たちは、オルフェウスさまから見捨てられた女の集まりなのです。

ネアイラ どういうことかしら。

ラディオケー 簡単に言うと、オルフェウスさまは、もう男にしか教えを説かない、ということです。

ネアイラ それこそ、どういうこと？

クロリス 私たちにも分かりません。でもオルフェウスさまは、確かにそう言っていました。そうして、私たちの夫や父親や祖父を「出家者の村」という新設の村に連れて行ってしまったのです。

ネアイラ 信じられない！

タリア はて……どうしてオルフェウスは、そんな無茶なことを言い始めたんだろうねえ。急に変になっちゃったのかね。

クロリス 確たる理由は分かりません。ですが、オルフェウスさまが奥様を亡くされたことが、どこかで繋がっているのは間違いないと思います。

タリア なんだそりゃ、男やもめの腹いせかい？

ゼリア タリアさまも、そう思われますか。

ネアイラ 「俺は妻を亡くして悲しいんだ。なのに弟子であるお前らは、幸せそうに家庭生活を送ってやるじゃないか。ならお前たちも、ちょっとぐらい、夫婦が切り離される悲しみを味わってみたらどうだ」ということでしょうね。

ラディオケー そうそう。私たちもそう思ったんです。だから、もうオルフェウス教徒のままでなんかいられない。教祖のほうから不条理に、しかも一方的に、こっちが切り捨てられたんですもの。

ゼリア いま思い出しても腹が立つわ。

クロリス 私たちみんな何とも言えない気持ちになって……そうしたらゼリアさんが、お酒のことを教えてくださった。

ラディオケー そう、それを飲んでみたいって話になったんです。

ネアイラ そうですね。腹立ちや憂さを晴らすのに、お酒よりもいいものはありませんから。

タリア（ゼリアに）で、そのあたりの事情は、お前たち以外の総勢も変わらないんだな。

ゼリア ええ、そうです。

タリア じゃあ、今夜の祭に、お前たち全員を参加させてやろう。ディオニュソスさまは、捨てられた者たちの救い主なんだからな。

ラディオケー ありがとうございます。

タリア 楽しみにしてるがいい。酒は本当に、どうしようもない悲しみを癒す「薬」になってくれる飲

み物なんだ。

ゼリア　じゃあ私、みんなのところに戻って、祭に参加できるってことを伝えてくるわ。

タリア（皆に聞こえないように独白）そして酒は、復讐の気持ちを育む栄養ともなり、凶事を焚きつける炎ともなる。お前たちに与えたら、さぞかし面白いことが起こるだろうよ。

戯曲ディオニュソス 世界の墓 I

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
